

『メサイア』はなぜクリスマス・シーズンに演奏されるのか

ヘンデルがロンドンの劇場でオラトリオを上演していたのは、毎年、「四旬節」の期間でした。「四旬節」というのは復活祭前の6週間半の期間で、期間は毎年移動しますが、およそ2月から4月ころです。この期間、信徒はイエスの受難や復活を思い、自らの罪を省み、世俗的な娯楽を避けるのです。オペラ・シーズンは秋から翌年の春まで、約半年も続きますが、途中、「四旬節」中は多くの娯楽が禁止されていました。一方、オラトリオは題材が宗教的であり、華やかな衣装や背景、演技を伴わない演奏会形式で上演されたため、娯楽性が低いとして、「四旬節」中も上演が許されていました。ヘンデルは他の競合娯楽が少ないこの期間中に抜け目なくオラトリオを開催し、客を集めることに成功したのです。したがって、『メサイア』ばかりでなく、ヘンデルのオラトリオはほとんどこの期間に上演されていました。

『メサイア』がクリスマスに演奏されたのは、ヘンデルが没して50年以上も後のことで、1815年の12月24日、アメリカのボストンにおいて、当時設立されたヘンデル・ハイドン協会の幕開け演奏会が最初とされます。以来、徐々にクリスマス・シーズンでの『メサイア』が定着していったと思われます。ボストンで、なぜクリスマス・イヴに演奏されたのか、また、それがなぜ定着したのか、その理由は定かではありません。おそらく、直接的な誘引は『メサイア』の第1部に現れる、すばらしい「降誕の場面」でしょう。また、この作品の全編を貫いている神の深い慈愛がイエスの降誕を祝う気持ち、少し敷衍して、人を思いやる心と奥深い所で温かく共鳴し合うからではないでしょうか。

ハレルヤ・コーラス起立の由来

『メサイア』は1742年4月13日、アイルランドのダブリンで世界初演されました。ロンドンでの初演はその1年後1743年3月23日、コヴェントガーデン王立劇場で行われました。その時、ロンドンの聴衆は音楽が進むにしたがい、深い感動を覚え、ハレルヤ・コーラスの「全能にして主であられる神が for the Lord God

Omnipotent reigneth」のところにくると感極まり、臨席していた国王ジョージ2世ともども、一斉に席を立ち、コーラスが終るまで立ち尽くしたとされます。大変、感動的なエピソードですので、そのままにしておきたいのですが、以下のような、がっかりするような話も伝えられています。国王は音楽に感動したのではなく、単に、退席しようとして立ち上がっただけであり、聴衆は国王が退席するのを着座のまま見送るわけにはいかず、立ち上がってお見送りしたというのです。なにはともあれ、先のエピソードがありそうに思えるほど、ハレルヤ・コーラスは全能の神を讃えるのにふさわしい壮大無比の傑作であることに変わりはありません。

ヘンデルの英語力

ヘンデルは語学に堪能でした。彼の声楽曲にはドイツ語、イタリア語、フランス語、英語、スペイン語、ラテン語の6ヶ国語が使用されています。イギリスに渡ってからも、日常会話は英語でしたが、喧嘩となると4ヶ国語ぐらいがごちゃまぜになったと言われます。

初めてロンドンに渡り、英語の歌詞に音楽をつけるようになった頃、ヘンデルは時に歌詞の意味を誤解し、本来の意味とはまったく異なる表情の音楽を付けることもありましたが、全体的には驚異的なスピードで英語をマスターしました。

英語に熟達しながら、一方では、ヘンデルの晩年の作品にすら不自然な英語が観察されることも事実です。『メサイア』にもそのような例があります。一般的に、それらはヘンデルの英語に対する無知のせいであると言われますが、私は少し違う観方をしています。確かに、不自然な英語のいくつかはヘンデル自身の誤解に原因があります。しかし、もし、そのような不自然な歌詞のすべてがヘンデルの無知のせいであるとしたなら、ヘンデルはofが前置詞であることも、theが定冠詞であることも知らなかったことになるのです。事実上、ヘンデルは言葉のアクセントを守ることや、文の区切れを正しく処理することより、曲の全体的な表情を優先していたと、私は確信しています(勿論、いつもというのではなく、それが必要な時に限りますが)。それは、おかしな歌詞の充て方をする現代日本の若者の歌ととてもよく似ています。英語に熟達しながら、時には、日本の若者の歌よろしく、ノリの良さを優先しているヘンデル。なかなかお洒落ではありませんか。

バッハとヘンデル

バロックの二大巨匠と称される二人は互いに一度も会ったことがありません。ヘンデルはロンドン定住後も、時折、生まれ故郷のハレの町に里帰りしました。1719年の里帰りの折は、当時ケーテン宮廷にいたバッハがヘンデルに会おうとハレに向かいますが、すれ違いに終わりました。1729年の里帰りの折には、当時ライブツィヒにいたバッハが、長男ヴィルヘルム・フリーデマンを使い立て、自宅に招待しますが、ヘンデルが断ったとされています。バッハはヘンデル作品に関心があり、ヘンデルの『ブロッケス受難曲』という作品を妻と一緒に手写しています。しかし、ヘンデルは一地方作曲家のバッハのことなど眼中になかったようです。バッハ・ファンには失礼!

さて、二人にはいくつか共通点があります。二人はともに1685年にドイツに生まれました。しかも、ヘンデルは2月23日にハレで、バッハは3月21日にアイゼナハで生まれましたから、誕生日も生まれた町もそれほど離れていません。また、晩年にはともに眼を患い、ジョン・テイラーという同じイギリス人の「やぶ」眼科医の手術を受け、ともに盲目となりました。バッハは1750年に65歳で、ヘンデルはそれより9年後の1759年に74歳で、ともに当時としては十分長寿を全うしてこの世を去りました。

しかし、二人の人生はなんと対照的でしょうか。バッハはドイツを一歩も出ることなく、生涯に2度結婚し、後半生はライブツィヒの教会で礼拝用の音楽を作曲しました。一方、ヘンデルは青年期にドイツを飛び出し、イタリアで修業を積み、国際的な名声を獲得しましたが、生涯独身を貫き、ロンドンでオペラやオラトリオといった劇場の娯楽音楽を作曲しました。

オラトリオが娯楽とは不思議に思われるかも知れませんが、ヘンデルのオラトリオはオペラの延長線上にある作品なのです。オラトリオは題材が聖書によるために宗教的作品と思われがちですが、それはうわべだけのことです。オラトリオにおいてヘンデルが描きたかったのは、そこに展開される生身の人間ドラマなのです(『メサイア』はまったく例外で、正真正銘宗教的な作品ですが)。世俗的な題材によるオペラにおいても、宗教的な題材によるオラトリオにおいても、ヘンデルはそこに登場するひとりひとりの人物の美しさや強さばかりか、醜さや弱さもすべてあるがままに受け入れ、彼らの思いに深く共感して音楽を作りました。

というわけで、二人の最大の相違は、「音楽を通じて神を讃美したバッハ」に対して、「音楽を通じて生身の人間を讃美したヘンデル」と表現することができるかもしれません。しかし、当時の思想背景を考え合わせると、「人間を讃美する」ことで、実は、ヘンデルもその創造主である「神を讃美していた」のかもしれない……ね。

ヘンデルの歌手たち

ヘンデルの時代、オペラに関わる様々な人々の中で、歌手、それも、本場のイタリア人歌手が最も高給取りでした。その中でも主演級歌手、つまりプリマ・ドンナ(女性主演=ソプラノ)や、プリモ・ウオーモ(男性主演=カストラート[去勢した男性歌手])はものすごい給料をもらっていました。ロンドンはその経済力にもものを言わせて、本場イタリアから最高の歌手をかき集めていました。ヘンデルの関わった歌手の中で最高の高給取りはイタリア人ソプラノのクッツオーニやイタリア人カストラートのセネジーノで、年俸2000ポンドでした。当時、ヘンデルの年俸は800ポンド(推定)、オーケストラのコンサートマスターは100ポンド、他の平団員は60ポンドとか、30ポンドでした。給料の差はその世界の格付けそのものでしたから、スター歌手はいつも傲慢でした。多くの台本作家や作曲家は歌手の言いなりで、歌手の気に入るような筋立てやアリアを書くのが仕事でした。時には、歌手はアリアが気に入らなければ、以前に他所の劇場で歌った他の作曲家のアリアを旅行鞆から取り出し、勝手に差し換えることすらありました。

しかし、われらがヘンデルは音楽面では決して妥協しませんでした。クッツオーニはヘンデルとの初仕事となった『オットーネ』というオペラの稽古で、あるアリアが気に入らないと言い始めました。つまり「鞘当て」ですね。ヘンデルは怒って「窓から放り出してやる」と言って譲らず、機先を制しました。

そのような歌手とのいざこざに嫌気がさしたヘンデルは安上がりで潜在能力のある歌手を雇い、自ら訓練して優秀な歌手に育て上げるようになります。ストラダというイタリア人ソプラノ歌手がその例です。そのような歌手は総じて謙虚で、ヘンデルとの人間関係も良好でした。大金で他の球団からスター選手をかき集めるのではなく、無名の選手をしっかりと育成し、安上がりの運営を心がける。あれこれ、どこかで聞きました？

ヘンデルの人物像

ヘンデルの性格は頑固で、激情家でしたが、ユーモアのセンスもありました。日常生活では、レンブラントの絵画など美術品の収集家であり、美食家であり、投資家でもありました。音楽面においてはとても精力的でした。上演に3時間も要するようなオペラを生涯に約40曲、オラトリオを30曲、その他にも世俗的なカンタータを約100曲、教会作品、器楽曲も多数残しました。晩年まで枯れることのなかった旺盛な創作力と、劇場における舞台活動を生涯、継続した強靱な肉体には感服するしかありません。

彼が示した音楽家としての「自主独立の精神」は時代をはるかに先駆けるものでした。当時の作曲家は教会、王室や貴族、劇場のいずれかに雇われて、音楽活動を展開していました。しかし、ヘンデルは1734年(49歳)から、それまでの劇場雇いの身分を離れて、自ら興行主となり、オペラを上演し始めます。独力で劇場を借り、歌手を手配し、様々な支払いをし、チケットを売りながら、さらに新作を作曲し、リハーサルをして、舞台公演を敢行していくのです。

なにより、ヘンデルの最大の魅力は「人間的な温もり」でしょう。彼の「人間愛」や「弱者への共感」は、生前彼が行っていた慈善活動(困窮音楽家救済基金、孤児養育院)に明らかです。遺書における末端の人々(遠い親戚縁者や召使まで)への温かい心配りにも読み取れます。そのようなヘンデルの「人間愛」や「弱者への共感」は生身の人間ドラマを扱った彼のオペラやオラトリオの中で、永遠に生き続けることでしょう。

(みさわ としき・音楽学、ヘンデル・フェスティバル・ジャパン実行委員長)



*The Figures will yet who would think
"Till they have seen the Glass & Drink"
When they see the Glass of soft Drunkeness
And all that has a soft Drunkeness
The soft Drunkeness is to Eat
The soft Drunkeness is to Eat
The soft Drunkeness is to Eat*

ヘンデルの風刺画(1754年頃)
大食漢で大酒飲みのヘンデルを風刺する詩「愛すべき野獣」が添えられている。